

全員飛び起きて身支度をすませ、整列します。50人が一度に身支度を始めるため、顔を洗うことは競争になっていました。井戸が1つしかないため、場所を取り合います。井戸水で顔を洗いますが、ポンプでくんだ温かい水ではなく、前日にためておいた水で顔を洗っていました。冬の寒い時期は氷がはり、とても冷たかったです。

暖房に関して、今のような暖房機器はありませんから、火鉢を使用していました。火鉢とは大きな器のような瀬戸物の中に灰をたくさん入れて、炭で火をおこすことによって暖をとる道具です。お寺の広い本堂に1つしかなく、50人全員がそこへ手をかざしました。しかし、わたしたちは一番低学年でしたから、6年生の子が陣取ったらはじき飛ばされます。暖房にはあたれず寒い思いをしました。寒さをしのぐために10~20分程ランニングも行いました。汗をかく手前でお寺にもどり、寮母さんが用意しているお湯をためた洗面器の中へ手をいれま。手袋のような衣服は一切ないので、そうすることで冬の寒さにたえていました。

朝食は現在も使用されているような長机に向かって、正座をして食べていました。お茶碗などの食器は各自家から持参しますが、自分のものを使うのではなく、順番に並べられているものを使います。

疎開先では、勉強らしい勉強はできませんでした。何度か近くの小学校へ行きましたが、徴兵のため教師の数は減っており、教科書も満足にない有り様でした。

お寺ならではの遊びや悩み

疎開先の遊びで面白かったのは肝試しです。寒い冬の夜にお寺の横のお墓で肝試しをして遊んでいました。今のように電気もないので、とても怖かったです。お墓を通り奥へ行くと机が置いてあり、そこへ自分の名前を書いて帰ってくるというルールでした。途中におどかし役もいて、上級生は1人で行かなければなりませんでした。わたしは低学年なので2人でも許されていました。当時はそのようにして遊んでいました。

お寺の本堂で一番怖い場所といえばトイレでした。

一度外へ出て、石畳の廊下をわたり50mほど行かなければなりません。横はお墓なので、夜中にトイレに行きたくなくても怖くて行けない子ばかりでした。みんな行くのをがまんしていました。一生懸命がまんして、だれかがトイレに行く音がしたらあわててついて行きます。そうすると、いつも3人ほどがトイレにたっていました。しかし、人数分の場所がないので順番を争って、一番あとになれば大急ぎでもどるということをしていました。それほど夜中のお墓は怖かったです。慣れてくると一番に行くのがいいとわかりますので、わざと大きな音をたててみんなにアピールし、がまんしていた人があわててついてくるのを待ちました。最初は勇気がいりますが、一番になれると楽でした。ゆっくり行ってゆっくり帰れます。後から行くと最後は1人であわてて帰らなければいけません。

取っても取ってもわいてくるシラミ・ノミ

シラミやノミにはとても困りました。米つぶのような白い小さな虫が、下着などの縫い目に大量に連なりました。かまると大変なかゆみが起こり夜も眠れません。元は白い虫が血を吸うと黒く変化し、シャツを脱ぐと黒い点々が大量にこびりついていました。それを退治するためにつぶすと、とてもくさい臭いがします。そのためシラミを取っては瓶のふたに入れ、それを火鉢の火にくべることで対処していました。今のような殺虫剤はもちろんありませんでした。とても取りきれず、かゆみにはとても悩まされました。



「疎開学童の授業(常盤小学校)」提供：大阪公文書館

勉強よりも大事な燃料集め

当時はおかゆを炊く時に、大きな釜で木を燃やして炊いていました。今であればガスや電気でごはんが炊けますが、当時は燃料から自分たちで集めなければいけません。燃料は山に取りに行きますが、山までの道のりはとても長く、時間がかかりました。上級生はうまく木の枝などを拾えますが、小学校3年生のわたしたちはできません。そのため、落ち葉をかき集めて大きな木を燃やす時にくべていました。そうすると大きな木が燃えやすくなります。授業時間は、そのようなことに時間を使っていました。

月に一度の楽しみ

月に1回か2回、親が疎開先へ面会に来ることが唯一の楽しみでした。小学生ですから、親に会えるのはと

てもうれしかったですね。わたしの両親は疎開に反対していたので、特に頻繁に会いにきてくれました。

嘘の手紙

大阪の家族へハガキを書くこともできました。しかしハガキには、「元気になっています。」「お腹いっぱい美味しいごはんをいただいています。」という、嘘ばかりを書いていた。そうしなければ、先生に却下されてしまい、投函してもらえないからです。「しんどいです。」「食べものがなくて困っています。」「戦争はいつ終わりますか。」などと書けば没収されます。大阪の両親から来る手紙も「日本は勝った。」という内容ばかりで、後から考えればあれだけの空襲を受けていてなぜ勝てるのかと思いました。当時は情報が一切なく、日本中の国民がだまされていました。

戦争を知らない世代へのメッセージ



特攻隊や原爆、戦地で亡くなられた方はもちろん気の毒です。しかし、空襲で亡くなられた民間人の方のことも忘れないでいただきたいですね。同じ大切な命で戦争の犠牲者です。当時は報道もされませんでした。もちろん原爆の被害は桁がちがいで、その方たちのことは毎年8月に話題にのぼります。そのことについては当然だと思います。しかし、日本全国に空襲が行われ、民間人が亡くなられている事実に関しても、同じだけ思い返していただきたいです。

祖父母や両親の言うことに対して、冷たくするのではなく、話だけでも聞いていただきたいです。そして「なぜあの人はこんなことを言ったんだろうか?」と、考えてみてください。必ず何か意図があると思います。他人の意見に耳をかたむけ、そのことを深く考えることが、平和につながると思います。